



Title	『哲学探究』が「覚えがき」である理由
Author(s)	溝越, 大秦
Citation	メタフュシカ. 2021, 52, p. 59-70
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/85563
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

『哲学探究』が「覚えがき」である理由

溝越大秦

序

ルートヴィヒ・ウィトゲンシュタイン著『哲学探究』（以下 PI）は所謂「治療哲学」の形をとった自身の考察を「覚えがきとして書き下した」（PI 序）ものである。「治療哲学」は、哲学的諸問題を一種の思考の疾患のようなものと捉え、それらを治療するように問題を解消していくという形をとる。

「哲学の方法が一つしかない、というようなことはない、実にさまざまな方法があり、いわば異なった治療法がある」（PI § 133）と言われるように、PI 中の「治療」と捉えられる考察は枚挙にいとまがない。それぞれがターゲットとする哲学的問題に対してさまざまな観点から突き詰めた考察をしており、全てを体系的に纏めるのは困難を極める。

しかし、一貫して変わらない姿勢は見受けられる。哲学的諸問題はいわば言語に対する誤解から生じており、ウィトゲンシュタインはそれらの誤解を色々な角度から解きほぐそうとする。そして決まって、日常的な具体的な例をあげながら、哲学者達が抱える誤解から生じる矛盾を指摘し、哲学的諸問題の解消へと考察を進めていく。これは『論理哲学論考』（以下 TLP）で写像理論や命題関数、命題形式に基づいて言語の限界を画定し、哲学が取り扱える問題を限定することによって哲学的諸問題の無効化を図った方法とは正反対に見える。

ウィトゲンシュタインは、この方法によって得られた考察や思想が「むりやり一つ方向へ向けようとしたとたん、効力が弱まるだろう¹」（PI 序）と言う。そのためか、自らの考察の結果をまとめようとして「不成功に終わった」（ibid.）という。それにも関わらず、ウィトゲンシュタインは PI を諸々の考察の「覚えがき」の集まりとして出版したのである。具体例に基づいた個別的考察が中心となれば、本人であるウィトゲンシュタインにも体系的にまとめることが不可能であったのは致し方ないとも言える。

PI の思想を公にする際、たとえ自身の効力が弱められようと、無理矢理にでも思想を体系的

¹ 原文は“erlahmen”の接続法Ⅱ式“erlahmten”である。邦訳では現代において不適切と思われる表現が用いられていたため、“erlahmen”の「弱まる」「衰える」という意味を汲んで「効力が弱まるだろう」に変更している。

に纏めれば、ウィトゲンシュタイン自身が嫌う「自身の思想の誤解」を避けられる可能性が高くなったかもしれないにも関わらず、彼は「誰かが自分自身で考えるための励ましになりたい」(PI ibid.)という望みの元、覚えがきをあるがまま公開した。つまり、彼は「まとまった一冊の体系的な書籍」よりも「覚えがき」に哲学的諸問題の解消へと貢献する希望を見出したのである。

以上より、本論文はウィトゲンシュタインが取った姿勢に対して次のように問いたい。すなわち、なぜ哲学者達の矛盾を指摘するために日常的な具体例を重視するという姿勢を貫こうとしたのか、ということである。そのために、言語の誤った使用としての哲学的諸問題を解消する条件と、日常的な具体例が哲学的諸問題の解消にどれほど力を発揮するのかを明らかにする。

1. 哲学的諸問題を解消する条件

哲学的諸問題の解消には様々なアプローチがあり、それについては多様な解釈がなされてきた。Kuusela (2008) は、一定の観点で事物を捉えようとする意欲 (will) が哲学的問題の特徴であるとし (Kuusela, 2008, p.45)、ある言葉の使用を個別的な例を挙げ、哲学的問題を解消するための新しい見方を明瞭に提示する (Ibid., p.45, Ibid., p.89) ことが重要であると主張する。Morris (2007) は "This" や "That" が真の固有名だというラッセルの主張に対する、"This is N" と人は言うが、"This is 'This'" と言うことは無い、というウィトゲンシュタインの主張に注目し (Morris (2007), p.75)、文法的記述によってその誤りを訂正することが重要であると主張する。さらに、Morris (2007) はウィトゲンシュタインが PI § 67 にて「事物には何か共通のものが無ければならない」というテーゼに対して繊維の集合としての一本の糸の例から、そのような共通のものが必ずしも必要でないと説得するケースに注目し思考の代替へと働きかけるという場合も想定する。(Morris (2007), p.80)

両者は、ウィトゲンシュタインが哲学的諸問題に陥っている者の思考や概念理解に対して、他の思考や概念理解の可能性を提示することにより、哲学的諸問題を招きうる思考や概念理解から抜け出させることを重要視している。しかし、両者の解釈では哲学的諸問題は解消されず、哲学的諸問題に陥らない思考と哲学的諸問題に陥る思考が同じように正当化され、並立して存在する恐れがあるだろう。それならば、ウィトゲンシュタインはなぜ文法的記述の矛盾を指摘し、訂正させようとしたのか。なぜなら彼にとって、そのような問題の「再発防止」としての問題の消滅もまた重要な課題であったからと考えられる。では、彼はどのようにして哲学的諸問題が解消されたと考えたか。

ウィトゲンシュタイン曰く、日常的な言語の中で言葉の誤った使用が生まれた場合、それを正さなければわれわれの言語活動は「空回り」(PI § 132) し、滞ってしまう。言葉の誤った使用による「空回り」が、哲学的諸問題を招くものである。日常言語でも用いられる「知識」「存在」「対象」「自我」「命題」「名」などの語 (PI § 116) について誤った使用を行うために、哲学者たちは哲学的諸問題に対してあれこれ考察を巡らせる。しかし、誤った使用を前提とした考察から有用な結論は導かれえない。そうすると、哲学者は「途方にくれている」(PI 123) 状態に陥り、有名な「ハエとり壺」(PI § 309) に入ってしまったハエに例えられてしまう。

ウィトゲンシュタインは、哲学的諸問題を消滅へ向かわせるという彼自身の哲学的活動のなかで、日常的な言語使用を思い出させるように様々な例を出す (PI § 133)。それにより、言葉の新しい使用を提案するのではなく、我々が言語をスムーズに運用していくための観察とそれらの実証を繰り返す (ibid.)。

同時に、自身の哲学的活動が日常的な言語活動にどのような影響を与えなければならないかということは述べておらず「われわれは、自分たちの言葉の使用に関する規則の体系を、聞いたこともないようなやりかたで洗練したり、完全にしたりしようとは思わない」(PI § 133) とも述べている。つまり、従うべき完全な規則を提示するためではなく、あくまで言語活動がスムーズにいかず「空回りしている」状態を解消するための哲学的活動なのである。「空回り」をさせないためには、言葉の誤った使用を修正する必要がある。

では、言葉の誤った使用を修正するにはどうすれば良いか。それは「使用」や「誤った」などの語について考察するのではなく、それらの語の日常的な用法に目を向けることなのである。ここで、諸々の考察について「日常的であると言われあくまでわれわれが見逃している形式を繰り返し強調することが目的の例であろうとも、空想上の例である以上日常的なものではない」という反論が予想される。たしかに、実際の日常生活をカメラ等で切り取ったようなものではないという意味では日常的でないと言われるかもしれない。

しかし、ウィトゲンシュタインが、日常的な使用に目を向けることによる哲学的諸問題の消滅が「完全な明晰さ」(PI § 133) を得ることと同義であると言うことに注目してほしい。「完全な明晰さ」を得ていれば「言葉の使用が明確に指定されてい」(PI § 142) て、「あの場合、この場合にどう言うべきかを知っており、疑いを持たない」(Ibid.)。そして、言葉の使用が明確に指定されるのは「正常な (normal) 場合にだけ」(Ibid.) である。つまり、日常的とは、カメラ等でありのままを切り取ったようすではなく、明確に言葉の意味が指定される「正常な場合」なのである。この「正常な場合」とはどのような場合か。異常な場合と比較し、明らかにする。

異常な場合とは、言葉の使用が指定され難い例である。ウィトゲンシュタインは、PI § 139 にて、われわれは老人が杖を使って坂を登っていく絵を、その格好のまま、つまり後ろ向きで坂を滑り降りていくと説明しない上に、なぜそのような説明をしないかを「わたくしには説明する必要がない」(ibid.) という。仮にそのような説明を行った場合さらなる説明を求められたり、あるいは笑いを誘ったりすることも考えられる。

さらに、「一塊のチーズを天秤皿に乗せ、天秤の傾きに合わせて値段を決める手続き」(PI § 142) にて、チーズの大きさが絶えず変化してしまえば、そのような映像に対してわれわれはどのような言葉を使用するだろうか。ここでは、天秤やその傾きに対する値段表は何の意味もなさず、「値段を決める手続きである」と言うこともできない。

ウィトゲンシュタインは、「老人が杖をついたまま後ろ向きに坂を滑り落ちる」という言葉の使用を何故われわれがしないのか「わたくしには説明する必要がない」と言ったり、「常に大きさの変化するチーズを秤値段で売る」というようなケースにて言葉の使用が成り立ち難いと言ったりすることから、われわれの実際の言葉の使用がわれわれの生活がその使用によって矛盾なく

成立しうる範囲で成立していると考えたように思われる。

「老人が杖をついたまま後ろ向きに坂を滑り落ちる」ことが生活で起きることは、相当特殊な場合でなければありえない。「常に大きさの変化するチーズを秤値段で売る」ことがまかり通れば、われわれの経済はたちまち崩壊する。

以上より、哲学的諸問題が消滅する「完全な明晰さ」、つまり言葉の意味が明確に指定される正常な場合というのが、われわれが日常生活を送る上で、日常的に言語を扱う上でエラーが起きない場合のことを指すことが確認された。「例が日常的ではない」という反論へは、哲学的諸問題の解消のために使われる例が現実に対して矛盾なく正常であり、言葉の意味が明確に指定されている場合、その例は日常的であると回答する。

次に、1.2 にて、言葉の日常的な、正常な使用と哲学的諸問題の誤った使用は何が違い、どのようにして両者が衝突するのかを論じる。

2. 言葉の正常な使用と誤った使用

哲学者が陥る言語の誤った使用は誤った内包的な「意味」について論じるところから来ており、日常的な用法とはつまり素朴で外延的な「意味」である。ウィトゲンシュタインは哲学者の誤った議論を外延的な意味から修正しようとする。では、ある語について、われわれはどのようにしてその内包的な「意味」から期待される「日常的」と呼ばれる具体的な例を出し、誤った使用を修正できるのか。

「我々は語を聞いたり、発声したりする時、その意味を理解している。我々はそれを一挙に把握する」(PI § 138) とウィトゲンシュタインは言い、そのような「意味」は、「じっさいの時間のうちに延長している〈使用〉とは違った何かなのである！」(ibid.) と言う。ここにウィトゲンシュタインは内包的な意味と外延的な意味の対立を置く。

この「〈使用〉とは違った何か」を、ウィトゲンシュタインは PI § 139 にて「立方体」という語を聞いた時に思い浮かべる映像と仮定する。そうすると、「立方体」の映像を思い浮かべながら三角錐を指差し、立方体と言うのは映像に適さないと主張する場合が考えられる。しかし、その三角錐の底面に注目し、立方体の一側面として見立てるのであればそのような使用はあり得るのである。

ウィトゲンシュタインからすれば、「立方体」の映像によって我々はその使用を「心理的に強制されているのであって、論理的に強制されているわけではない」(PI § 140) と言われうる。同じ映像を思い浮かべても、それらの使用が違ったものであることは大いに考えられる。

では、同じ映像からどのようにして違った使用が生まれるのであろうか。ウィトゲンシュタイン曰く、「映像が我々に別の使用を期待させている限りは、[映像と使用とが]² 衝突することがありうる」(PI § 141)。ある映像から期待した使用と、実際の使用が違えば、映像と使用が衝突する。

それぞれの使用の期待に対して、「一つの正常な場合といくつかの異常な場合」(PI § 141) が

² 引用文中の [] 内は筆者による補足。

想定される。そして、「正常な場合にだけ、言葉の使用が我々に明確に指定されている。[…] 異常な場合になればなるほど、されここで何を言うべきかが疑われる」(PI § 142) という。その期待は正常な場合に対してである。PI § 139 の老人の絵に対してわれわれが期待する言葉の使用は「老人が杖をついて坂を登っている」である。

つまり、使用と映像とが衝突するのは、その映像にとって使用が異常な場合である。異常な使用は「この映像に対してこの使用は当てはまらない」と言われ、誤った使用とも言われる。PI § 139 の老人の絵に対する「老人が後ろ向きで坂を滑り降りている」という説明の例がそれに当たる。ウィトゲンシュタインは内包的な「意味」を映像に例えて考察したが、言葉の意味を一挙に把握あるいは理解しても、その映像にとって異常な使用を選択してしまうこともある。

哲学的問題となっている言葉に対して哲学者が想定する内包的な意味、つまり哲学者が思い浮かべる映像と、哲学者による誤った議論、つまりその使用は衝突することはない。なぜなら、哲学者の言葉の使用は、哲学者が思い浮かべる映像と衝突しないからである。

しかし、哲学者による言葉の使用は、日常的な、言葉の使用が明確に指定された完全に明晰な状況における使用と衝突する。言い換えれば、哲学者による誤った内包的な「意味」つまり異常な映像から生じる議論、異常な使用が日常的な、正常な使用と衝突している。ここで、哲学的諸問題を解消するためには哲学者による言葉の異常な使用を正常な使用に修正してやる必要がある。3. にて言葉の使用をいかにして修正するかを論じる。

3. 言葉の使用を修正する

言葉の誤った、異常な使用と正しい使用の衝突とその修正について、ウィトゲンシュタインはPI § 143 にて生徒に数列を書かせる例を挙げている。A が B に対してまず 0 から 9 までの数字を書き出し、次に数字を 0 から 9 まで順番通りに書くように指示する。そこで B が数字を一つ飛ばしで書く、1, 0, 3, 2, 5, 4 という数列を書く等のケースが想定される。このままでは、数字を順番に書かせるという行為が正常なものではなくなってしまい、言語活動の「空回り」が起きてしまう。

そこで、B の書き方が不規則な間違いであれ規則的な間違いであれ、間違った書き方を何かしらの手段でやめさせたり、その書き方を受け入れ、正常な書き方を別の方法として教えたりすることができる。しかし、ウィトゲンシュタイン曰くそれではその生徒の学習能力が「妨げられてしまう (abbrechen)³」可能性があるという。ウィトゲンシュタインは経験からではなく、そのようなことが想像可能だからこそこの可能性を指摘する (PI § 144)。

たしかに、間違った書き方をやめさせることと正常な書き方を身につけさせることは別のものであり、正常なやり方を別の方法として紹介することは、間違った書き方がなぜ望ましくないかを教えることができない。

つまり、PI § 144 でウィトゲンシュタインが挙げた修正方法では、A やわれわれにとって正常

³ abbrechen には「折れる」や「中断される」の意味があるが、「能力の中断」や「能力が折れる」という表現は日本語として不自然であるため、「能力が妨げられる」と本文中では表現する。

な場合がBにとって異常な場合なままであり、Aやわれわれにとって異常な場合がBにとって正常な場合のままなのである。言語の空回りを防ぐためには、「0から9までわれわれの満足のいくように」(PI § 145) 書かせなければならない。

そして、ウィトゲンシュタインは0から9までを順番通りに書けたのなら、次は10以上の数字を書いていくケースを想定する。ところが、どこまで書けばBが0からはじまる自然数列の体系について、言葉の異常な使用ではなく正常な使用ができるかという明確な境界線を引くことはできないという (ibid.)。

しかし、われわれは実際に、正しく数列を書き続けているBに対して「もう大丈夫だ」というふうに思うであろう。ではどのようにして明確な境界線が無くてもBは正常な使用ができていると言われるのか。

その中で、「理解している」と言われるための条件は何か。ある言葉の意味を理解する、あるいは把握する、ということとはどのような場合に成り立つのか。ウィトゲンシュタインは、数列を書き続けいくという一種の言葉の使用は理解そのものではないが「理解する」ことからうまれたものであるという主張を想定する。どこまで書けば理解しているという線引きはできないが、理解とその適用が全くの別物であるとは言い難いというものである。

ウィトゲンシュタインはそのような回答に対して、その数式を理解している人は四六時中理解しているのか、式について考えている時のみ理解しているのかという疑問を投げかける。この疑問から、ウィトゲンシュタインは「理解」と「苦痛」や「興奮」といったような語の使用とを比較し、「理解は一種の心の状態である」という語の使用が誤っていないかを検証せよと言う。例えば、『いつきみの苦痛が和らいだのか』と『いつきみはその語を理解できなくなったのか』とを比較してみよ (PI § 149) という比較である。彼は理解を「心的な出来事」(PI § 154) と捉えれば混乱が生じると言い、どのような状況で「その数列の先を知っている」あるいは「その数列の先を書ける」などと言っているかに注視せよという。

そこで彼はAが数列を書き、Bがその法則を見つけようとするケースを想定する。そこでBは考察の末、数列の一般項「 $a_n = n^2 + n + 1$ 」を当てはめ、見事その仮説を的中させる。あるいは、雑多な考えのなかで公差の数列を見出し、数列を続けたり、事前に見たことがある数列として答えたりするケースも想定される。

Bが数列の一般項を答える時、少なくとも式に思い至っているものであり、式に思い至ることが理解することであると結論づける場合もあるだろう。しかし、ウィトゲンシュタインに言わせれば、Bが数列の一般項を思い浮かべていようと、(偶然思い浮かんでいた、何かしらの媒体で同じ式を見かけて思い出している等) 数列を理解していないケースが考えられる。例えば、授業中にその数列の問題が出された時にうたた寝しながら「 $a_n = n^2 + n + 1$ 」と呟いたとしても、それだけで理解しているとは思わず、教師は「なぜそのようなことを言ったのか」と問うであろう。

Bが数列の一般項を思い浮かべていようと、(偶然思い浮かんでいた、何かしらの媒体で同じ式を見かけて思い出している等) 数列を理解していないケースが考えられるように、雑多な考えとともに導き出されたのならば、理解が一般項や公差のみであるとは言い難い。「理解」は一

般項や公差以上のものであることに注目せねばならない。

ある数列を理解したと言うためには、その数列のさらなる続きを言うなど、理解に特徴的な出来事、正当化するものが存在しなければならない。したがって、理解はそれを要求しない苦しみや興奮などの心的な出来事と同列に語ることはできない。つまり理解は心的なものではなく、正当化できる実践を要求するものなのである。ではその正当化とは詳細にはどのようなものが考えられるか。

たとえば、§ 151のように、数列の一般項を言い当てた際、途中式すら完璧に書いていようと、「同じ数式をこの前見た」や、「なんとなく」と本人が言っているようでは「理解している」とは言われ難い。そこで、Aが一般項を答えたBに対して、途中式を書かせたり、別解を求めたり、数列の和を考えさせたり、一般項という概念を扱っていない場合は数列を続けさせたりしようとすることも考えられる。これらは、様々な状況下での正常な使用を要求していることになる。

無論、ここで全ての要求に答えたBが同じように「昨日同じ問題を見かけて覚えていた」と言えば、出題時点での「式を理解している」とは異なる「状況」となる。これは非常に不安定な「状況」という概念による「理解」の正当化であるが、それもあってウィトゲンシュタインは「理解」に「いかなる境界線も引けない」（§ 145）と語るのであろう。

ここで、「突然その〔数列の〕先を知り、そのシステムを理解した」（PI § 155）ような時に抱く「特別な体験」が「理解」を正当化する「境界線」ではないかという問いもまたあげられるであろう。ウィトゲンシュタインは、われわれが「わかった！」などといった時の「特別な体験」にも注目し、それを否定しない。

しかし、「特別な体験」が何らかの脳波のようなものとして特定されようとも、それによって「理解」の正当化がなされる訳ではない。なぜなら、「特別な体験」で抱いた時の「映像」のようなものが、要求されている正しい使用と衝突することが十分に考えられるからである。§ 151のケースで言えば、Bがそのような測定機器にて「特別な体験」が観測されている中で数式の一般項を間違えることは容易に考えられる。むしろ、そのような測定結果もまた正当化の材料の一つである「状況」のうちにある。（その測定機器では「特別な体験」を特定できないというケースはここでは扱わない。）

しかし、我々は実際に困難な事象に対して「わかった！」と発言したり、あるいは日常的に「閃いた」という言葉を用いたりする。これらは否定できない事実であり、様々な場面で「特別な体験」を経由したと考えても差し支えない生活を送っている。そのような「わかった！」と言う発言や、それを抱いた時の「私は数式を続けられる」のような発言は「シグナル」（§ 180）であり、「それ [= シグナルとなる発言] が正しく応用されたかどうかを、われわれは、かれがそのあとで何を行うかによって判定するのである」（ibid.）。

ここでの「シグナル」という言葉の役割を噛み砕くと以下のような内容となるだろう。つまり「特別な体験」からくる「わかった！」という発言などが、実際に「理解」の検証に移る目印としてのシグナルということである。つまり、「特別な体験」は「理解」の正当化をもたらすための契機、あるいは動機のような役割を置けるとも言える。

ウィトゲンシュタインにおける「理解」は、数列を例に挙げて考察しているが、いかなる場合でも、「...を理解している」ということを正当化するものは、「わかった!」と言ったような時の「状況」である。ある問題に対して、「わかった」や「これが続けられる」といったシグナル的発言から、本人が正常な使用を様々な場合や要求下で実現することができれば、言葉の異常な使用から離れ、正常な使用を身につけられるという結論になるであろう。

以上のように正常な使用を身につけさせることができたとして、例えばPI § 143 の数列の例で出てきたAとBの間でどのようにして正常な使用が共有されるのか。Aが何も言わず、何も示さずに正常な使用を共有できるのだろうか。しかしそれこそ正常な場合から大きく逸脱したものである。

PI § 143 では、AがBに対してまずもって0から9まで書いたが、これは直示的定義のように作用していると考えられる。このことから、正常な使用の共有における直示的定義の有用性を提示したい。4.にて、さらに詳細に言葉の使用の修正に直示的定義がなぜ有用であるかを論じる。

4. 直示的定義の有用性

直示的定義はPIにおいて「『これを2という』—と言って2つのくるみを指す」(PI § 28) 場合のように、指差などをして「人名、色彩語、材料名、数詞、方位名など」(PI § 28) を定義することができるものである。

直示的定義によって言葉の正常な使用をされた者の使用を見れば、正しい使用をしているかどうかを検証できる。いわば直示的定義は基準として比較されるサンプルであり (Baker & Hacker (2009), p.95)、言語における規範的な役割を持つ (Baker & Hacker (2009), p.88)。言葉の正常な使用をしている者は直示的定義を通して異常な使用をしている者に働きかけるのである。

一方で、直示的定義はPI § 28 のように2つのくるみを使って何が「2」と定義されているか、くるみが2であるのか2つの集合が2であるのか、様々に解釈されうる (PI § 29) のものであり、直示的定義はそうにして誤解を招きかねないという問題がある。

しかし、直示的定義による説明を誤解している場合、「説明された語をどのように使うかによって示される」(ibid.)。たとえば、2つのくるみを指差して2という数字を定義した場合、りんご2つとくるみ1つを置いて「わかった!」というようなシグナルを受け、検証として「2はどちらか」を聞いた時、生徒がくるみを選べばそれが誤解であるとわかる。この場合、直示的定義に対する言葉の異常な使用であり、また追加で2を定義する必要がある。生徒が2の正常な使用 (ここでは「2はどちらか」と聞かれて2つのりんごを指す) を選択すれば、直示的定義の誤解は解け、正常な使用を身につけたと言える。

ここで、直示的定義を用いて異常な使用を正常な使用に修正する過程をPI § 143 の例を活用しながら導き出していく。AはBに対して0から9までの数字を書き、数の正しい順番として直示的に定義する。「わかった!」というようなシグナルとともにBはそれを1つおきに書く、1, 0, 3, 2, 5, 4...という風を書くなどの数の異常な使用を見せる。そこでAは例えば0から3までの数を順番に書かせるなどをし、シグナルと検証を繰り返して正常な使用に近づける。

Bが0から9までを書けば、Bの数列の理解が正しいかどうか、ただ書き出された数字をコピーしていないか検証される。たとえば、PI § 145にあるように、10以降の数字を書かせるなどである。0から9までの数を用いたAによる様々な要求にBが答えられた時、Bは0から9までを用いた数列の正しい使用を習得したとみなされる。

そのようにして直示的定義を用いる際、危惧されるのが「直示的定義によって示された使用が明晰で日常的な使用に対して異常であること」である。直示的定義された言葉の使用に対して正常な使用をしたとしても、直示的定義が明晰で日常的な使用に対して異常な使用を提示していれば意味がない。たとえば、2つのくるみを指さし、「これを3という」などと言って3を定義するようなことである。

もちろん、そのような直示的定義による「3」の定義でそのあとの人生に支障がない場合何の問題も起きないであろう。しかし、そのようなことはあり得ない。あくまで直示的定義は我々の日常生活に基づき、それらと矛盾しない形で提示されるべきなのである。「哲学者の仕事は、一定の目的に向かって、諸々の記憶を寄せ集めることである」(PI § 127) とあるが、寄せ集められた記憶と矛盾しない形で直示的定義を行うことが重要なのである。

以上が直示的定義による言葉の異常な使用の修正の過程である。しかし、実際にウィトゲンシュタインが哲学的問題に頭を悩ませている各哲学者に対して語の直示的定義を行っているかと問われると、そうではないという答えが圧倒的であろう。あくまでも言語使用を子どもなどに教える原初的段階のものに留まるという立場が主であろう。しかし、哲学的諸問題に陥っている者に対して、言葉の正常な使用を提示し、その者の使用を修正するという手続きは直示的定義そのものである。PI § 66で、ウィトゲンシュタインは「ゲーム」という語についての哲学的問題を解消する手立てを示す。5.にて、その手立てを解説する。

5. 哲学的諸問題の解消—「ゲーム」という語についての考察を中心に

彼は様々なゲームについて「『何かがそれら [= 諸々のゲーム] に共通でなくてはならない、そうでなければ、それら [= 諸々のゲーム] を〈ゲーム〉とはいわない』などと言ってはならない」(ibid.) と言う。ここで問題となっている哲学的問題とは、「ゲームと名のつくものには何か共通のものがある」というテーゼである。ここでウィトゲンシュタインは、このテーゼが「ゲーム」という言葉の異常な使用であることを指摘し、正常な使用へと導いていく。

「ゲーム」についての哲学的問題を解消する際、ウィトゲンシュタインは「それら [= 諸々のゲーム] すべてに何か共通なものがあるかどうか、見よ (schau)⁴」(ibid.) と言う。この「見よ」とはつまり、「ゲームと名のつくものには何か共通のものがある」という、哲学的問題を招くテーゼを解消する「一定の目的」のために現実のゲームに関する「諸々の記憶を寄せ集め」、調べて

⁴ 原文(独)は“schau, ob ihnen allen etwas gemeinsam ist.”である。“schauen”には間接疑問と合わせて「確かめよ」や「調べてみよ」と訳される場合があり、直訳すると「それら [= 諸々のゲーム] すべてに何か共通なものがあるかどうか、確かめよ(調べてみよ)」である。しかし、当の文は哲学的問題の解消のため哲学的問題に陥った者が素朴な日常言語に立ち返るように仕向けているものであるため、敢えて邦訳の「見よ」をそのまま用いる。

みよということである。直示的定義をせずとも、現実在即した正常な場合のゲームの例を出し、問題となるテーゼにおける「ゲーム」の使用と比較させるのである。

ウィトゲンシュタインは、例えばカードゲームやチェス、球戯などの例を挙げている。そこで様々なゲームを比較していくと、比較するゲームによって「共通の特性がたくさん姿を消して、別の特性が現れてくる」(ibid.)という。カードゲームと球戯の共通点、チェスとカードゲームの共通点はそれぞれ「勝敗がある」や「手持ちの駒(札)が存在する」などがあるが、群としての共通点であり、全てに共通する点ではない。

しかも球戯にて、一人で行う所謂「壁当て」の場合には勝敗という特性が消滅する。さらに、そこでいう技術という語でさえ、駒の動かし方や戦術を読まれない能力を指すチェスとボールの運び方やボールの追ひ方、はたまたラケットの振り方等を指すテニスでは全く違う様相を見せることも挙げる(ibid.)。しかし、それらの種目を我々は「ゲーム」と言い、チェスやテニスにて全くもって違う様相をもつ「技術」という語を使用する。

上記の考察から、「ゲームと名のつくものには何か共通のものがある」というテーゼは「ゲーム」という語の異常な使用であったことがわかる。そしてウィトゲンシュタインは「ゲーム」という語において我々が「互いに重なり合ったり、交差しあったりしている複雑な類似性の網目を見、大まかな類似性や細かな類似性を見ているのである」と言う。

以上の過程は、「見よ」というウィトゲンシュタインの言葉にあるように、「ゲーム」という言葉の日常的な、正常な使用の例を挙げ、哲学者の「ゲームと名のつくものには何か共通のものがある」という「ゲーム」の使用が異常であることを示し、正常な使用に修正させるものである。ウィトゲンシュタインによる「ゲーム」と名のつくものの列挙と比較は日常的な、正常な使用に則るものであり、「ゲーム」を正常に使用方法を哲学者達に示している。つまり言葉の正常な使用の直示的定義なのである。

このようにして、ウィトゲンシュタインは日常的な、言葉の使用が明確に指定された正常な場合の具体例を挙げ、哲学的諸問題に陥った哲学者達による言葉の異常な使用を正常な使用へと修正し、哲学的諸問題を解消へと導くのである。

結

なぜ、ウィトゲンシュタインはPIを一冊の体系的な書籍に仕上げるよりも、PIで哲学的諸問題を解消するための日常的な具体例を用いた「覚えがき」の形で考察を書き記すことを優先したのか。5までの議論を踏まえ、この問いに回答する。

日常的な言語使用の具体例は、言葉の意味が明確に指定された正常な使用である。直示的定義によって言葉の正常な使用を示し、「わかった!」などという定義を受けた者の使用を見れば、正常な使用をしているかどうかを検証できる。そして、様々な要求下で正常な使用ができていれば、それを身につけたと言われるであろう。

一方で、実際にウィトゲンシュタインが各哲学者に対して語の直示的定義を行っていたとは言いがたい。しかし、直示的定義をせずとも、現実在即した正常な使用の場合と、問題となるテーゼ

における語の使用とを比較させ、異常な言語使用に陥っている哲学者達の言語使用を修正していく。

日常的な言語使用の具体例が哲学者たちの異常な言語使用を修正する効力を鑑みれば、ウィトゲンシュタインが「覚えがきとして書き下した」理由は以下のように考えられる。すなわちウィトゲンシュタインは哲学的諸問題の解消の手立てを、まとまった一冊の体系的な書籍よりも、日常的な言語使用の例による個別的かつ具体的なケースを用いた直示的定義の集まりとして公開した方が、哲学的諸問題に悩まされている「誰かが自分自身で考えるための励ましに」なるという確信を持っていたから、という理由である。

(みぞこしたいしん 哲学哲学史・博士後期課程)

参考文献

- Ludwig Wittgenstein, *Philosophical Investigations*, translated by G. E. M. Anscombe, P. M. S. Hacker and Joachim Schulte, revised fourth edition by P. M. S. Hacker and Joachim Schulte, Wiley-Blackwell 2010.
(L. ウィトゲンシュタイン, 藤本隆志訳, 『哲学探究』, 『ウィトゲンシュタイン全集 8』, 大修館書店, 1976) ※引用で用いた際、送り仮名等で適宜表現を変更している。
- G.P.Baker & P.M.S.Hacker, *Wittgenstein Understanding Meaning: Essays Part. 1*, Wiley-Blackwell, 2009.
- Katherine Morris, 2007, “*Wittgenstein’s Method: Ridding People of Philosophical Prejudices*”, Guy Kahane, Edward Kanterian, Oskari Kuusela (Editor), *Wittgenstein and His Interpreters: Essays in Memory of Gordon Baker*, Wiley-Blackwell; 1 editio.
- Oskari Kuusela, 2008, *The Struggle against Dogmatism: Wittgenstein and the Concept of Philosophy*, Harvard University Press.

Why *Philosophical Investigations* is a memorandum Taishin MIZOKOSHI

Why did Wittgenstein prefer to publish *Philosophical Investigations* in the form of an album of various reflections on the use of everyday concrete examples to resolve philosophical problems, instead of compiling these reflections in one systematic book?

Concrete examples of everyday language use are normal uses of words with clearly defined meanings. If we demonstrate the normal use of a word through a direct definition and examine its use by those who understand it and its definition, we can verify whether the word is being used correctly.

Alternatively, assuming that Wittgenstein in fact provided an explicit definition of the word to each philosopher, is difficult. However, even without explicit definitions, Wittgenstein corrects the language use of philosophers who have fallen into a wrong or an abnormal use of language. He guides them in comparing the use of words in the thesis in question with their use in reality.

Philosophical Investigations was published in a form that was considered unfinished. However, he seems to have been convinced that the publication of a memorandum, as it were a direct definition, could describe solutions for philosophical problems through examples of everyday language use, and “better” encourage someone to think for himself compared with a systematic book in one volume.

「キーワード」

ウィットゲンシュタイン、使用、哲学的諸問題、日常、直示の定義